

鈴木春信の浮世絵に見る服飾描写

Fashionable Portrayal of the Costumes in Ukiyo-e of Suzuki Harunobu

福田 博美

Hiroimi Fukuda

要旨

江戸時代中期、鈴木春信（? - 1770）は多色摺による錦絵を草創させた浮世絵師である。本論文は春信の「初摺」と「後摺」の相違および「後摺」の多様性に着目し、摺りの比較から服飾描写の特色を考察し、その背景を交友関係より捉え、当時の服飾文化の一面を解明することを目的とする。『浮世絵聚花』を主要図版資料とし、摺りの重なる絵巻・見立絵・揃物に注目した。錦絵は明和2（1765）年の絵巻交換会で好事家・画工を中心に創案され、高級な奉書紙に技法が凝らされた。春信の高価な初摺は、富裕な購買層を中心に、特に三井家では京都本店への土産として重宝された。一方、再版となる後摺は、安価なため急速に庶民層へ広まり、春信の画工名を記すことで価値付けられた。幕府の禁令下、春信の錦絵制作の背景には巨川や莎雞らの工案者をはじめ、画工を学んだ西川祐信や近所の住人で親交のあった平賀源内と有力なパトロンであった三井高美との交友関係がみられた。春信の服飾描写における摺りの違いは小袖・帯・羽織等の模様を表れた。そこに鶴の丸・雪・源氏香・市松模様や空摺による布目模様がみられ、特に多様な雪模様は春信の独自性を示した。

●キーワード：浮世絵（Ukiyo-e）／鈴木春信（Suzuki Harunobu）／服飾（Costumes）

I. はじめに

浮世絵版画は版元の出資のもと、絵師が原画にあたる版下を描き、彫師が版木を彫り、摺師が摺るという分業によって制作される。版面の磨減欠損の無い極めて初期に摺られた版画は「初摺」と称され、絵師・彫師・摺師・版元の意向が反映された。しかし、その後の摺り増しとなる「後摺」では絵師の手を離れ、版木の修正・省略や追加など摺りの違いが生じた。

拙稿では初代歌川豊国（1769 - 1825）、初代歌川国貞（1786 - 1864）の美人画に描かれた服飾の写実性と当時の流行を捉えた¹⁾。そこでは摺りの違いによる模様や色彩の変化は特記できなかった。しかし、江戸時代中期、多色摺による錦絵を草創させた鈴木春信（? - 1770、以下春信と表記）には初摺と後摺が明確に区別される作品が多く、特にその服飾描写に変化が顕著である。通例では後摺に絵師の関与はほとんど無いとされるが、果たして春信は後摺に関わらなかったのだろうか、「鈴木春信画」「春信画」とされる後摺の服飾描写は春信によるものかとの疑問から摺りの違いに着目して服飾描写の特

色を捉えたい。尚、春信の作品には初摺と断定しがたいものも在るが、ここでは摺りの異なるものを研究対象とする。

春信の服飾描写に関する先行研究は小林忠氏が「江戸の装いに学ぶ」²⁾で洒落本と浮世絵から春信の流行描写を取り上げた。近年では、西中村暁子氏が「鈴木春信の服飾表現について—錦絵にみられる江戸風の好尚—」³⁾において京都の浮世絵師西川祐信（1671 - 1750、以下祐信と表記）の女性像を手本とした春信の江戸風の好尚を論じた。また、「鈴木春信の服飾表現について（二）—墨摺絵本に描かれた今様の風俗—」⁴⁾では墨摺の同一手法で表現された絵本の小袖模様と比較して今様すなわち当世の風俗を描く春信に注目している。本稿では、それらを踏まえ、春信の初摺と後摺の服飾描写の比較に主点を置き、当時、浮世絵のデザインを企画した工案者である好事家をはじめ春信の錦絵誕生の背景に関わる交友関係を広げて捉え、それが作品にどのように影響しているか考察することで江戸中期の服飾文化の一面を解明することを目的とする。

主要図版資料は、春信の画題解説で摺りの比較が詳細に記された『浮世絵聚花』を用いて、春信の所収作品655図の内、摺の違いを有する183図に絞った(表1)。錦絵が確立した明和2(1765)年から春信が逝去する7(1770)年までの作品を時代順に画業を辿り、摺の違いによる服飾描写に注目したい。図版に単色写真が多い点から色彩の変化を捉えることが難しいため、模様を中心に、着装の特徴もあわせて考察するものである。

II. 春信の画業

浮世絵師の伝『新增補浮世絵類考』において春信は、明和の始より吾妻絵を画き出して、今錦絵と称するの祖とす。…中略…春信一生歌舞伎役者の画をかゝずして云。我は大和画師なり。何ぞ河原者の形を画くに堪んやと、…⁵⁾と記される。春信は初期に役者絵を残すが「大和絵師」と自称し、美人画を得意とした。

本章では、春信の画業の内、服飾描写の特色を導くものに絞る。

1. 絵暦

森島中良(1754-1808)の随筆集『反古籠』において「江戸絵」の項に、

明和二申の歳、大小の会といふ事流行て、略暦に美を尽し、画会の如く勝劣を定むる事なり、此時より七八遍摺の板行を初てしはじむ。⁶⁾

とあり「大小」は月数をさし、大の月は30日、小の月は29日で、当時の暦は大小で表された。明和2(1765)年、それまで3色程で摺られたが、7~8版摺りにより美を尽した絵暦が始まった。多色摺りの江戸絵は「錦絵」と称され、同書で「錦絵は翁の工夫なりといふ」⁷⁾と記され、本稿では翁を春信と解釈したい。

春信の絵暦の多くは、大小の月や和暦および干支を服飾に意匠化した。明和2(1765)年の絵暦「矢場の女たち」の娘の帯に「大、式、式、五、六、八、十」(図1:左)、矢函に「明、和、式、乙、酉」(図2)と記され、

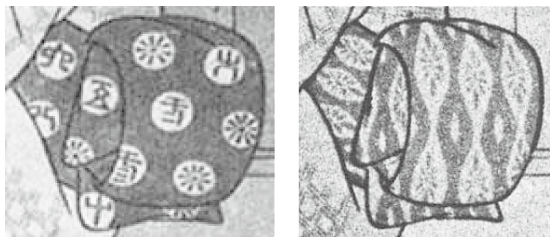


図1「矢場の女たち」帯模様の変化(左:初摺、右:後摺)

この年の大の月が2・3・5・6・8・10月で、乙酉(きのととり)の干支であることを示す。ところが後摺の帯は初摺の干支の丸模様が立涌模様に変化した(図1:右)。

翌3(1766)年作「小町娘の憩い」では右の女帯に「正、三、五、六、八、九、十一、大」(図3:左)とあり、大の月は1・3・5・6・8・9・11月と変化している。この後摺は暦の文字が削除されて、きものが地味な色目になった(図3:右)。

カレンダーは翌年に使用できないため、人気の絵暦は暦部分を変化させて翌年以降、摺られたのであろうと推察して調査した結果、春信の作画にかかる絵暦は、同じ年でも大小月の表示を削除し、図様や彩色の一部を改めるなどして、浮世絵の版元から錦絵として出版された例が多いことがわかった⁸⁾。そこで、絵暦の変遷を辿ったところ、享保(1716-36)年間頃商品として出版された絵入大小暦すなわち絵暦は宝暦(1751-64)年間に売買が禁じられ、浮世絵としての絵暦は出版されず、私的な製作とその無償配布が黙認された。その流行がピークに達した明和2(1765)年から翌年、絵暦の交換会(大小会)が茶屋などを会席として盛んに開催された。江戸の好事家たちの絵暦製作の熱狂が、木版多色摺の技術を急速かつ高度に開発し、錦絵誕生の契機となったのである。

2. 見立絵

古典物語や故事、謡曲などの題材を当世風俗で描写した絵を本稿では「見立絵」と称する⁹⁾。

『源氏物語』を基に「見立夕顔」、『伊勢物語』は「見立業平東下り」と、古典物語の一部をクローズアップして画証化し、その意匠は服飾品や調度品へと幅広く展開した。「見立夕顔」は3版、「見立業平東下り」は5版摺られ、その需要の高さが伺える。

まず、明和3(1766)年頃に成る、中判二枚続きの左図「見立夕顔」に注目したい。初摺にはデザインの工案者「莎雞(さけい)」の落款と押印がある。図4の変化が示す通り、初摺では青海波模様の地紋を絞りで表現した小袖は、第2版でその色目が濃くなり、第3版では地模様を削除して黒地となった。

次に、明和5~6(1768-69)年の制とされる「見立業平東下り」(図5:左)は、後摺の色が濃くなり、ポストン美術館には小袖・帯に絹地のアップリケが施された「きもの絵版画」¹⁰⁾(図5:右)が所蔵される。

3. 揃物

揃物とはひとつの画題や内容のまとまりによって複数の図で構成されるシリーズ物の錦絵をさす。

明和3(1766)年頃の作とされる「坐鋪八景」の初版には工案者「巨川」の落款と印があるが、第2版はおそらく1・2年後の出版で、落款・押印がない。第3版以降は1770年代後半あるいは1780年代初めに摺られたものとみられる。「あんとうの夕照」・「あふきの晴嵐」・「鏡台の秋月」・「琴路の落雁」・「台子の夜雨」(図6)はいずれも4版、「ぬり桶の暮雪」は3版、「とけひの晩鐘」が2版、「手拭かけ帰帆」は1版と人気を博したシリーズであった。全体に後摺は色目が濃くなり、服飾の変化に比べて壁や衝立の模様など背景描写が変わる特色がみられた。これらの八枚揃は知友に配るためだけの摺物であったが、版木が浮世絵の版元に譲られ、錦絵として売り出されたのである。

次に明和4(1767)年の「五常」に工案者名は無いが「礼」が5版、「智」が3版、「仁」・「信」は2版、「義」が1版であった。重版された図7は婚礼における色直しの光景で、右の花嫁の白小袖のみ裾模様に変った。本来、この婚礼衣裳では白小袖が正式のため、服飾の知識を有さない者の関与が見出せる。

また、春信の男帯の幅は相対的に女帯に近く、幅広の描写が多い。特に若衆(わかしゅ)と言われる少年の帯幅は広い。中でも蔭間茶屋を描いたとされる「義」(図8)に登場する若い男女は帯の先端に付いた房飾りの証からプロの男娼では、とされる¹¹⁾。しかし、髪型に性差が見られ、少女(右)の帯にも房がある点に疑問が残る。

4. 紙質・価格・購買層

安永期(1772-81)の磯田湖龍齋(生没年未詳)やそれ以降の絵師の中判は、縦が25~26cm、横が18~19cmであるが、春信の中判は少し広く縦が27~29cm、横が20~22cmある。その理由は、春信の中判には、大広奉書や中広奉書といった高級紙が使われるからである。それに対し、安永期以降の中判は、大奉書かそれより安い紙が一般的であったとされる¹²⁾。

柏原古玩氏談によると、明和のころ、細絵は十二文、大錦は二十四文に売られており。…春信の中錦は一枚一匁(百六十文)であって、他の版画が百姓、職人、中小商人の土産物であったのに対し、春信の錦絵を購う者は武士もしくは大商人であって、『坐鋪八景』な

どは八枚揃桐箱入、金一分だった¹³⁾。

とされ、春信の錦絵の購買層は武士や大商人などの富裕階級であったことがわかる。

絵暦交換会の流行した明和2・3(1765・6)年頃、春信の錦絵は古典文学などの知識を有する、教養のあるごく限られた層を対象とし、他の絵師より高価なものであった。しかし、その後の錦絵技法の普及により、幅広い層の享受者へと春信の意識も変わったようである。

錦絵制作の実態を検証する石井研堂氏は、

錦絵の『新版』は、用紙を善くし摺も吟味し、価も従つて高かった、それが、後摺の田舎出しとなれば、紙質を落し、摺賃を下げ、安物で又売つたものだ¹⁴⁾と高価な「初摺」から安価な「後摺」への変容が解され、その結果、錦絵は庶民層へ普及されたのである。

III. 春信の交友関係と服飾

高級な奉書紙に美を極めた春信の錦絵が誕生した背景を人間関係から捉え、その結果として服飾にどのように表現されたかを考察したい。

1. 工案者

工案者とは大小絵暦交換会において絵暦のデザインを創案した人物で俳諧を趣味とする好事家である。会の主催者として活躍した巨川と莎雞は優れた絵暦を多数制作し、特に春信を画工として重用した。文政4(1821)年、諏訪頼武の随筆『仮寝の夢』の「錦画之事」では今の錦画ハ大小の摺物殊外流行、次第二板行種々色をまじへ、大惣二なり、牛込御旗許大久保甚四郎俳名臣(巨)川、牛込揚場阿部八之進砂鷄(莎雞)、此兩人専ら頭取二而、組合を分ヶ、大小取替会所々に有レ之。¹⁵⁾

と記される。「巨川」の俳名を持つ大久保甚四郎忠舒(ただのぶ)は、牛久御旗本千六百石取の家柄で書院番を勤めた。「莎雞」こと牛込の禄高千石の旗本阿部八之丞正寛(まさひろ)と二人を中心とした絵暦交換会は、いくつかの組合(連とか組と称した)に分れ、相互間で優劣が競われたようである。

春信の服飾描写では、工案者が関与した作品がその後大いに反映され、この点は前章の見立絵・揃物でふれた通りである。また、「見立夕顔」(図4)にみる扇面・短冊の小袖模様は後世、三井家伝来小袖類¹⁶⁾にも用いられ、美しさに教養を加味したモチーフである。

明和2(1765)年の絵暦「見立小野道風」では「鶴子

(かくし)工」の落款の下に「江雲」の朱印があり、翌年の絵暦「巫女の踊り」では「江雲」の印のみ初摺にみられ、後摺では工案者の落款は削られた。

さらに、「箋我(せんが)」をはじめ工案者の関与した初摺の服飾は模様が緻密に表現され、その後の錦絵の服飾描写に多用された。その詳細は次章で述べる。

2. 彫工・摺工

「画工 鈴木春信」「彫工 遠藤五緑」「摺工 湯本幸枝」三者の落款が揃って画面端に明記された錦絵には、「夕立図」「紋服を着る男を手伝う女」があり、共に明和2(1765)年の絵暦である。遠藤五緑(ごろうく)は神田紺屋町の遠藤松五郎のことで、錦絵の技術発展に関与した彫師であり、同様に湯本幸枝(こうし)も錦絵の創設に関わる摺師である。ところが、同年の絵暦「清水の舞台より飛ぶ女」では摺師の名は無く「鈴木春信 画」「高橋蘆川 彫」とある。高橋蘆川(ろせん)も主要彫師の一人で、明和初期から絵本など版本に携わった。これらは、後摺の2版では暦の文字はそのまま無款となり、3版ではどちらも削られた。

前掲の石井研堂著『錦絵の彫と摺』において、色分けの主要部は、絵師自ら之を書き分けること勿論なるが、衣裳の模様、屏風の七宝つなぎなど、さして重要でない部分は、一切之を門人に手伝はした¹⁷⁾と絵師(画工)にとって服飾の模様表現に重点が置かれなかったと述べる。

次に彫師(彫工)の技術が未熟な胴ぼりは、「手易い衣裳……を彫るに過ぎない者」¹⁸⁾として

衣服や何かの模様などは、それ程重要でないので、最初に之をほり、衣服のひだや衣紋や、又はそれに関する曲線や直線などは、其次にほり習ひ、¹⁹⁾

人物画の、胴体や衣裳や付立等は、第二三流の庸工で彫り成せる²⁰⁾

とある。

明和初年の大小摺物には、……彫工の名を、絵師の名と並べ署するのは多く見えるが、その後の錦絵には余り見えなくない²¹⁾

それは、営業組合の記名問題の紛議に基き、営業的と言はず、技芸的と言はず、一切、記名しないことになったのかと思はれる。²²⁾

彫師は、木版を彫り上げる時、自分の刀銘を勝手に彫り込む便宜が有るが、摺師はこれと事情を同じくしない、錦絵の製版の時は、誰が摺るやら、まだきまつて

居ない、これが摺師の名を錦絵の版の上に留められない大きな事由である。²³⁾

と記され、浮世絵の多くが画工のみ残った背景を知る。

3. 西川祐信

田辺昌子氏は祐信筆の多種の絵本から図案を借用した例は150図以上を数え、おそらく春信が手がけた全図の2割近くが祐信の図柄によるものと述べる²⁴⁾。その服飾描写は前述の西中村暁子氏の研究によるところが多であるが、改めて両者の関係を辿ると、前章で挙げた随筆集『反古籠』に、春信は「画は西川に学ぶ。」²⁵⁾とある。また、「東錦絵といふ看板を、所々の画草紙屋へかけさせて売出す。今の錦絵の祖なり。」と続く。さらに、春信死没のことは『西川家過去帳』に記されることからその関係は密接であった²⁶⁾。

4. 平賀源内

前掲『反古籠』の著者森島中良は、戯作において平賀源内(1728-1779、以下源内と表記)の門人であり、同書で春信は「神田白壁町の戸主にて画工なり。…風来先生と同所にて常に往来す。」²⁷⁾と記される。風来先生とは風来山人、すなわち源内をさし、彼が江戸に来て間もなく、神田白壁町(現在の神田駅界隈)の裏に住んだ。そして、同じ町内の「戸主」春信と親しく交わり、往き来していた。この点を山下恒夫氏は「石井研堂と浮世絵の世界」の中で

春信と源内とが同じ町内に住み、事繁く往来していたの中良の記述は、注目に値する。錦絵の開祖が春信だとしても、そこには、発明の天才源内の関与を、強く想像させるからである。²⁸⁾

と解説する。そしてこの頃、「大小絵暦の交換会」を通して春信と源内の親交はさらに深められた。

源内が序文を寄せた明和4(1769)年刊、大田南畝(1749-1823)の狂詩集『寝惚先生文集』では七言絶句「詠東錦絵」に

忽自吾妻錦絵移 一枚紅摺不沾時
鳥居何敢勝春信 男女写成当代姿²⁹⁾

と春信の東錦絵が世に出ると、紅摺絵は廃れ、それまで人気のあった芝居絵の鳥居派を凌いで、今の世間で流行している男女の姿を描写したと記される。

春信の「六玉川 高野の玉川」でフランス製の反射式覗き眼鏡を使い、眼鏡絵を写している娘や「浮世美人寄花 八重桜」の遠眼鏡を覗いて海を見る娘たちの姿に、

西洋の器物を用いた状況が描かれ、そこから源内との交流によるものと解される。

5. 三井高美

三井北家四代三井高美（1715-82）は俳諧、狂歌に優れた人物である。同家から春信の錦絵多数が発見された。驚くべきことに衣類のたとうに二十余枚の春信錦絵が貼装されたことから、三井高美が春信の有力なパトロンであった可能性を三井高陽氏は語っており、同家に春信の肉筆扇面二本が伝えられている。同氏の話に寛政ごろまでの京都本店への江戸店からの土産品は浅草海苔と錦絵であったというが、江戸絵、吾妻錦絵の成語もこのころはじまる関西へのアピールであったとされる³⁰。三井家に庇護され、多くの小袖類を目にする機会を持った春信がその意匠等を浮世絵に反映したと考えられる。

春信以降、三井家の土産として他の絵師の作品が用いられた記録は定かでないが、延宝6（1678）年に江戸駿河町に移転した越後屋呉服店の店頭を描いた作品は多い。³¹ また、『平賀実記』には源内と三井八郎右衛門（三井高美）との交流が記され³²、春信との三者の関係は書き残されないが、少なからず知り得た間柄であったことが推察される。

IV. 春信の模様表現

小袖・羽織・帯の描写において前章で触れた人々との関わりを持つ模様を中心に取り上げることでその特色を捉える。

1. 鶴の丸模様

図6の立美人の小袖、図7の花嫁の打掛および図9に描かれた鶴の丸模様は婚礼衣装を中心に表現される。江戸後期から末期頃の製作とみられる三井家伝来衣裳の小袖・打掛に鶴の丸模様がみられ³³、時代は経ても三井家との関連を推察できる。

春信の鶴の丸模様について、まず丁子屋の広告として家紋であるこの模様を描いた点が指摘できる。また、『見立曾我物語』では朝日奈三郎の紋に因むとも解される。

そして、『江戸名所図会』では「錦絵」を取り扱った地本問屋鶴屋の紋も鶴の丸模様であり、

江戸の名産にして他邦に比類なし 名にも極彩色殊更 高貴の御遊びにもなりて諸国に賞美する事尤夥し³⁴ と錦絵は高貴な江戸土産として珍重されていたことがわ

かり、これを称えてこの模様を用いた可能性も伺える。

2. 雪の模様

浮世絵に見る雪の模様は春信の服飾描写に代表され、そのデザインも多様である。雪持ち柳・笹・竹・松に属するものと雪輪とに二分される。

雪持ち柳は、明和2（1765）年の絵暦「伊勢物語 高安通い」（図10）にはじまり、後摺では色が濃く変化している。雪持ち笹は、図7の花嫁に衣裳を着つける女の小袖をはじめ初期の模様は図12に示すものである。また、雪持ち笹に竹を合わせた図柄は禿の衣裳（図11）に多く、小袖および帯にも多く描かれる。本稿では雪持ち笹と区別して雪持ち竹とする。絵暦では雪持ち松（図13）の類も初期の特色をしめし、後から松の木（図14）や松葉に変化する。雪持ち笹は錦絵以前の紅摺絵にも見られたが、工案者の作に始まる点やその多様性は大変興味深い。

雪輪模様も同様に小袖や帯にみられ、初期は図15のように雪輪の中央が空いたデザインが見られる。その後、雪の丸模様のように雪輪の中に花卉草木を描く図16や、絞りの模様を表した図17が登場する。雪輪の窪みを描いた図18の類も普及し、特に後摺に多く取り上げられた。

小林忠氏は江戸時代半ばを過ぎる頃から「降りつつある雪の絵」は登場、春信画「雪中相合傘」を例に挙げて恋の純化された様を表わす雪の演出効果³⁵を指摘した。

本研究に着目した際、春信の作品に雪の模様が多い点は、雪景色を多く残した円山応挙（1733-95）の影響があったのでは、と仮定した。応挙のパトロンであった三井家と春信との関連性から鑑みたが実証は難しかった。

春信の風景画に「雪中の白鷺」と題する雪景色があり、好んだモチーフを服飾のデザインに当用したとも推察される。とにかく他の絵師に抜きん出て描写される多様な雪の模様は春信の独自性といえる。

3. 源氏香模様

源氏香模様は五本の線の組み合わせによってできる52図を桐壺と夢浮橋を除いた『源氏物語』の各巻に配したものである。寛保元（1741）年に成る随筆『夏山雑談』にはその図解説明が明示され、当時の有識者がそれを了解していたことが推察される。

春信が女性の服飾にこの模様を用いた例は少なく図19の遊女は雲模様の打掛に「薄雲」の源氏香模様を配

した。薄雲の遊女名を暗示させる工案者の趣向が伺える。

対して男性の流行の短羽織には家紋に源氏香模様が多く用いられた。図20の「見立夕顔」は男性の短羽織につけられた家紋が物語の場面を判じさせる。因みに男性の従者は源氏車の虫籠を手に行っている。

源氏香の描写は多様化し、物語と関係なく表示された。後摺では線が擦れて模様が判明しにくくなる。そのころには模様と物語との関係性は薄れ、羽織の定紋として用いられたようである。

4. 市松模様

佐野川市松の好んで用いた石畳模様が市松模様と命名され、春信の女帯の模様に多く描かれた(図5:左・21・22)。その際、斜めに配された市松模様が特徴的である。これは、当時の小袖雛形本の石畳模様と同様で、小袖の遺品史料も現存する。

摺りの違いによる変化では、明和4(1767)年刊『絵本千代松』で「夕立風」の娘の女帯は「絵暦夕立図」からの転用であり、絵本の帯は市松模様になっている。

図21では今日のおはしより分を帯に挟んで歩く様子が描かれ、この着装は春信の描写に特記される。

5. 布目模様(空摺)

空摺は版木に模様を彫り、その模様を浮かび上がらせる摺りの技法である。石井研堂氏は「布目摺」をから摺の一種、布の織目を現はす摺方である、布目を出さうとする絵の形を、絹又は紗で剪りぬき、それを換板に張りつけ、強い馬連で、普通の如く摺るのである、紙にしとり有るために、よく織布の目にくひ入つて、布目を現はす³⁶⁾。

と説明する。高品質の奉書紙ならではの方法で和紙の風合いが効果的に表現されるのである。

図23には男女の被り物・小袖の違いに合わせた摺りの様子が捉えられる。白と黒の服飾に摺りの手間をかけることで表される美の極致ともいえる。これに関して田辺昌子氏は、「雪中相合傘」は最も洗練された道行の図であり、男女の黒と白の衣装は象徴的といえるかもしれない³⁷⁾、と指摘している。

図23の①～④に示すように服飾の部位別に手間をかけて空摺で布地の質感を表現した。後摺では個々を同じ筆致で描き、空摺風に色摺りされたものも登場する。さらに図23④の菱紋は服飾ばかりでなく住まいの壁のデ

ザインにまで表現された。

以上の模様以外でも図1の娘の小袖には緋の風合いを感じる。同様の模様は同年の絵暦「お百度参り」の着物にもみられ、春信の初期のデザインとして用いられた図柄であることがわかる。

また、麻の葉模様は明和2(1765)年の絵暦で巨川の「仏御前」をはじめ同じく「鍾馗と美人」、揃物では「坐舖八景 鏡台の秋月」に描かれる。後摺での変化は見られないが春信以降の絵師たちが多く用いた模様である。

小袖模様の多くは絵暦・見立絵・揃物で工案者のデザインに春信が関与したものを基に錦絵に用いられた。初摺と後摺の比較では後摺の色が濃くなる傾向にある。特に初摺において白地を空摺で施した。後摺では摺りが重なるとう間をかけない摺りの錦絵に変わった。

V. まとめ

春信の錦絵は明和2(1765)年の絵暦交換会において好事家を中心に創案され、高級な奉書紙に空摺などの技法が凝らされて極められた。購買層は武士や大商人で、高価な江戸絵は三井家では京都本店への土産として重宝された。幕府の禁令下、春信が贅沢な錦絵を制作できた背景には巨川や紗雛らの工案者の存在をはじめ、画を学んだ祐信、近所の住人で親交のあった源内と有力なパトロンであった三井高美との交友関係がみられた。

図12の「瀬川菊之丞」に関して、源内は著書『根無草後編』で

菊之丞が其容貌、誉るにも詞なく、譬んとするに物なし。餛(だんご)のお仙小指をくわへ、銀杏のおかんはだしにて逃(にげ)、…春信も筆を捨。³⁸⁾

と菊之丞の美しさを絶賛し、「春信も筆を捨」ほどと記された。それに対するかのように、春信は本図の両側に当時の評判美人お仙とお藤を配して「江戸三美人」と題した。源内との関係を示す作品としても興味深い。

春信の服飾描写における摺りの違いは小袖・帯・羽織等の模様へ変化をもたらした。特に鶴の丸模様、雪の模様、源氏香模様、市松模様をはじめ空摺による布目模様は特徴的である。前述の通り浮世絵の服飾描写に重点が置かれなかった当時であって、最高級の錦絵に相応しい気品を描いた春信には図柄等へのこだわりがあり、生地質感・風合いで表現したものと考察した。また、服飾部分に絹布を貼った「きもの絵版画」³⁹⁾は春信の特異性と推測したが、没後に手を加えた可能性が多大であるた

め直接の関与はみられなかったとも捉えられる。しかし、それらの主要遺品が春信の錦絵にみられる点は注目したい。

「初摺」と「後摺」では絵師の関与が区別され、後摺は絵師の手元を離れた、と解されるが、春信の後摺の服飾描写を見ると、落款を有する初期のものには関与していた可能性が高いことが推察できた。また、作画期後半に「鈴木春信画」「春信画」の落款が多く、庶民層に広まった安価な後摺は、春信の画工名を記すことで価値付けられたと捉えた。

(注)

- 1) 拙稿「初代歌川豊国の美人画に見る服飾描写」文化女子大学紀要 第32集 2001
拙稿「浮世絵に見る帯留と帯揚の形成に関する一考察」文化女子大学紀要 第28集 1997
- 2) 小林忠・大久保純一著『浮世絵の鑑賞基礎知識』至文堂 2000 PP.128-129
- 3) 服飾美学会編集発行「服飾美学」第52号 2011
- 4) 服飾美学会編集発行「服飾美学」第53号 2012
- 5) 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第2期11 吉川弘文館 1974 P.201
- 6) 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第2期8 吉川弘文館 1974 P.252(「申」は「酉」の誤りか)
- 7) 同書
- 8) 原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典』第3巻 様式・彫摺・版元 大修館書店 1982 P.113
- 9) 「見立」と「やつし」の区別を設けずに資料に準じる。
- 10) 福田和彦氏が命名した名称(典拠:福田和彦著『鈴木春信名作撰』ブックマン社 2008)
- 11) ビデオ:林美一監修「浮世絵の見方」下巻(春信・歌麿・北斎の魅力)新潮社 1991
- 12) 浅野秀剛・吉田伸之編『浮世絵を読む』1春信 朝日新聞社 1998 P.34
- 13) 高橋誠一郎著「概説-新訂 浮世絵二百五十年」(『高橋誠一郎コレクション浮世絵』第1巻 元禄浮世絵 春信 1976 中央公論社 p. 172)
- 14) 石井研堂著『錦絵の彫と摺』芸艸堂 2005 P.54
- 15) 小林忠編『日本の美術』No.228 春信 至文堂 1985 P.23
- 16) 「紅綸子地扇面流し模様打掛」・「紅綸子地扇面散し模様打掛」・「黒紅綸子地色紙短冊草花模様打掛」
- 17) 前掲14) P.50
- 18) 同書 PP.103-104
- 19) 同書 P.105
- 20) 同書 P.107
- 21) 同書 P.109
- 22) 同書 P.110
- 23) 同書 P.126
- 24) 前掲12) P.51
- 25) 前掲6) 同書
- 26) 前掲15) 同書
- 27) 前掲6) P.51
- 28) 前掲14) P.139

- 29) 揖斐高校注『新日本古典文学大系84』岩波書店 1993 P.23
- 30) 山口桂三郎編『肉筆浮世絵』第4巻 集英社 1982 P.137
- 31) ・奥村政信(1686-1764)「駿河町越後屋呉服店大浮絵」
・鳥居清長(1752-1815)「駿河町越後屋正月風景図」
・葛飾北斎(1760-1849)「富嶽三十六景江都駿河町三井見世略図」
・歌川国貞(1786-1864)「江戸名所 百人美女」コマ絵
・歌川広重(1797-1858)「富士三十六景 東都駿河町」
「名所江戸百景」
- 32) 岩本佐七編『燕石十種』中巻 東出版 1976 P.154
- 33) 「紅綸子地鶴の丸散し模様振袖」
綸子の地紋が鶴に丸模様の小袖として
「白綸子地御簾に草花蝶模様打掛」
「紅綸子地柴垣草花模様打掛」
- 34) 名著研究所編『日本名所圖會全集』江戸名所圖會巻一 名著普及會 1975 PP.76-77
- 35) 前掲2) P.80
- 36) 前掲14) P.97
- 37) 前掲23) 同書
- 38) 中村幸彦校注『日本古典文学大系』55 風來山人集岩波書店 1964 P.137
- 39) 「鳥籠を持つ男女」・「浮世絵美人寄花 娘風 萩」・「恋を渡す男」

(参考文献)

- ・原色浮世絵大百科事典編集委員会編 遠藤武執筆『原色浮世絵大百科事典』第5巻 風俗 大修館書店 1980
- ・原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典』第6巻 作品1 大修館書店 1982
- ・国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』東京堂出版 2008
- ・尚学図書編『文様の手帳』小学館 1987
- ・日本アート・センター編『名品揃物浮世絵』1春信 ぎょうせい 1991
- ・日本浮世絵協会編「浮世絵芸術」26号 三井コレクション 春信特集 日本浮世絵協会 1970
- ・『別冊太陽 日本のこころ65 平賀源内』平凡社 1989

(図版出典)

1. 左:鈴木重三・山口桂三郎著『浮世絵聚花』第4巻 シカゴ美術館I 小学館 1979 図166
右:デイヴィッド・ウォーターハウス著『浮世絵聚花』ボストン美術館補巻I(春信I) 小学館 1982 図190
2. 前掲1.左 同書
3. 左:山口桂三郎著『浮世絵聚花』第12巻 ギメ東洋美術館・パリ国立図書館 小学館 1980 図59
右:前掲1.右 図97
4. 左:植崎宗重他著『浮世絵聚花』第8巻 フォッグ美術館・ネルソン美術館 小学館 1980 図114
中央:高橋誠一郎著『浮世絵 美人画・役者絵2』春信講談社 1966 図17
右:前掲1.右 図94
左:デイヴィッド・ウォーターハウス著『浮世絵聚花』ボストン美術館補巻2(春信II) 小学館 1982 図350
右:同書 図491
6. 前掲1.左 図13
7. 左:前掲1.左 図195

- 右：前掲1.右 図253
8. 『浮世絵八華』1春信 平凡社 1985 図49
 9. J. ミーチ=ベカリク他著『浮世絵聚花』第7巻 メトロポリタン美術館・ニューヨーク公立図書館 小学館 1979 図3
 10. 左：前掲1.左 図42
右：前掲1.右 図88
 11. 前掲1.右 図2
 12. 菊地貞夫他著『浮世絵聚花』第15巻 東京国立博物館 小学館 1980 図90
 13. 前掲1.右 図83
 14. 同書 図58
 15. ドナルド・ジェンキンス他著『浮世絵聚花』第9巻 ミネアポリス美術館・ポーランド美術館他 小学館 1981 図46
 16. 前掲9. 図22
 17. 前掲4.左 図148
 18. ロージャー・S・キーズ他著『浮世絵聚花』第13巻 小学館 1981 図151
 19. 前掲11. 同書
 20. 前掲4.左 同書
 21. 前掲1.右 図21
 22. 前掲4. 図83
 23. 前掲9. 図2

表1. 『浮世絵聚花』にみる鈴木春信の浮世絵（初摺・後摺）一覧

No.	題 目	制作年	種別	模様	巻数(図版番号)・落款								図		
1	布に乗って空を飛ぶ女	2	暦	雪松	8(47)	錦松	補1(83)	—							13
2	水辺で涼む女	2	暦		補1(*176)	枝川	補1(*177)	—							
3	矢場の女たち(楊弓場)	2	暦		4(165・166)	—	補1(189・190)	—	補1(*191・192)	—					1・2
4	伊勢物語 高安通い	2	暦	雪柳	4(42・43)	—	補1(88)	—	補1(173)	—					10
5	炬燵で文を読む男女	2	暦		4(41)	—	補1(*170)	—	補1(*171)	—					
6	紅葉を焚く女	2	暦		補1(*183)	—	補1(*184)	—							
7	井戸水を汲む女	2	暦	市松	補1(92)	—	補1(*187)	—							
8	外出の支度	2	暦		8(*15)	①	補1(86)	—							
9	清水舞台より飛ぶ女	2	暦		12(150)	②	補1(*166)	—							
10	見立三夕 西行	2	見・暦		補1(*178)	素菊③	13(152)	素菊③							
11	見立小野道風	2	見・暦		12(50)	鶴子	9(*18)	—							
12	雪明かりで文を読む女	2	見・暦		補1(12)	里川印	補1(80)	—							
13	見立浦島	2	見・暦		補1(84)	細工師	補1(*167)	—							
14	見立恵比寿	2	見・暦		15(91)	—	補1(*168)	—							
15	見立孟宗	2	見・暦		9(15)	—	補1(*182)	—							
16	見立山夕 寂蓮	2	見・暦		9(*12)	③	補1(*179)	—							
17	見立為朝	2	見・暦		14(99)	③	補1(*180)	③							
18	雪の日に鉢の梅を切る女	2か	見		補1(91)	—	補1(*185)	—	補1(*186)	—					
19	小松曳き	2か		鶴	補1(87)	—	9(*19)	—	補1(*172)	—					
20	見立菊慈童	2~3	見		10(195)	—	補1(196)	—							
21	吹き矢	2~3		源・鶴	11(18・19)	—	補1(*193・194)	—							
22	桃の小枝を折る男女	3	暦		補1(20・21)	—	10(191)	—	補1(*200)	—					21
23	鬼の面	3	暦		補1(*205)	—	13(*4)	—							
24	耳そばだてて	3	暦		7(150)	—	補1(*207)	—							
25	小町娘の憩い	3	暦		12(59)	—	補1(*97)	—	補1(*204)	—					3
26	廻廊	3	暦		8(142)	—	補1(*202)	④	補1(*203)	—					
27	朝妻船	3	暦		13(18)	—	補1(*206)	—							
28	虚無僧と二美人	3	暦		補1(17)	③	13(*14)	③							
29	花魁道中	3			9(18)	③	補1(*197)	③							
30	遊女と禿と小犬	3頃			補1(2)	箋我	補1(*195)	箋我							11・19
31	坐鋪八景 あんとうの夕照	3頃	揃		4(8)	巨川	14(*17)	—	補1(*219)	④	補1(*220)	④			
32	坐鋪八景 あふきの晴嵐	3頃	揃	雪柳	4(7)	巨川	補1(*208)	—	補1(*209)	—	補1(*210)	—			
33	坐鋪八景 鏡台の秋月	3頃	揃		4(11)	巨川	補1(24)	巨川	補1(*214)	—	補1(*215)	—	補1(*216)	—	
34	坐鋪八景 琴路の落雁	3頃	揃		4(9)	巨川	補1(25)	巨川	補1(*217)	—	補1(*218)	④			
35	坐鋪八景 とけひの晩鐘	3頃	揃		4(12)	巨川	補1(*221)	—							
36	坐鋪八景 ぬり桶の暮雪	3頃	揃		4(10)	巨川	補1(*222)	④	補1(*223)	—					
37	坐鋪八景 台子の夜雨	3頃	揃	鶴	補1(211)	—	補1(*212)	—	補1(*213)	—					6
38	巫女の踊り	3頃	暦		補1(22)	江雲印	補1(*201)	—							
39	見立夕顔	3頃	見	源	8(113・114)	—	補1(93・94)	—							4・20
40	蚊帳に入る女	3頃			補1(99)	—	12(*19)	—							
41	見立黄石公張良	3頃	見	雪松	11(84・85)	③	補1(33・34)	④							
42	六玉川 井出の玉川	3~4	揃	鶴	補1(105)	—	4(47)	—	補1(237)	—					
43	六玉川 千鳥の玉川	3~4	揃		補1(36)	—	補1(*239)	—	4(49)	—					
44	六玉川 調布の玉川	5頃	揃		13(*27)	③	補1(*317)	③	4(46)	—					
45	六玉川 掃衣の玉川	3~4	揃	市松	補1(106)	—	補1(*238)	—	7(*212)	③					
46	六玉川 萩の玉川	3~4	揃		補1(35)	—	4(48)	—							
47	見立蘆葉達磨	3~4	見		8(2)	—	補1(*227)	—							
48	見立山吹の里	3~4	見		補1(29)	—	補1(*230)	—							
49	機織り	3~4	見		7(149)	—	13(42)	—	補1(*225)	—					
50	見立三夕 寂蓮法師	3~4	見	雪松	10(18)	③	補1(102)	③							
51	見立三夕 西行法師	3~4	見		13(46)	③	補1(*236)	③							
52	梅の枝折り	3~4		雪竹	補1(30)	—	補1(*231)	—							
53	釣りする男女	3~4		鶴	9(19)	—	補1(*226)	—							

No.	題 目	制作年	種別	模様	巻数(図版番号)・落款										図		
54	雪中相合傘	3~4		布目	7(2)	③	補1(107)	③	9(48)	③							23
55	薺を打つ美人	3~4			12(152)	—	補1(*224)	—									
56	雪の湯帰り	3~4			4(162)	③	補1(*245)	③									
57	水辺二美人	3~4			補1(108)	③	補1(*246)	③									
58	小野小町	3~4			11(91)	③	13(45)	③	補1(*241)	③	補1(*242)	③					
59	団扇売	3~4			14(140)	③	補1(37)	③	補1(*244)	③							
60	乗鶴美人	3~4			4(57)	④	補1(*247)	④									
61	月見る美人	3~4			8(18)	④	補1(100)	④	補1(*228)	④							
62	塀越しに語る美人と若衆	3~4			4(59)	④	補1(*248)	④									
63	五常 仁	4	揃	市松	4(193)	③	補1(*249)	③									
64	五常 礼	4	揃	鶴・雪笹	4(195)	④	補1(*250)	④	補1(*251)	④	補1(*252)	④	補1(*253)	④			7
65	五常 智	4	揃	雪輪	4(196)	④	補1(*254)	④	補1(*255)	④							
66	五常 信	4	揃		4(*37)	④	補1(*256)	④									
67	見立浦島太郎	4~5			4(66)	③	補1(*314)	③									
68	見立普賢	4~5	見		4(183)	③	補1(*303)	③									
69	見立文殊	4~5	見	源	9(125)	③	補1(*304)	③									
70	見立林和靖	4~5	見		10(*7)	③	補1(*305)	③	補1(306)	③							
71	文渡し	4~5		雪笹	8(52)	③	補1(131)	③									
72	八ツ橋	4~5	見		4(61)	④	補1(*310)	④	補1(*311)	④							
73	見立深草少将	4~5	見		13(157)	④	補1(137)	④									
74	見立渡辺綱と茨木童子	4~5	見		補1(47)	④	補1(*269)	④									
75	見立草摺引	4~5	見	鶴	14(54)	④	補1(121)	④									
76	見立司馬光	4~5	見		補1(136)	④	13(*31)	④									
77	三十六哥仙 斎宮女御	4~5	揃	鶴	8(20)	③	補1(*259)	③									
78	三十六哥仙 源重之	4~5	揃		補1(115)	③	補1(*260)	③									
79	三十六哥仙 在原業平朝臣	4~5	揃		13(121)	④	補1(*257)	④									
80	三十六哥仙 小野小町	4~5	揃	市松	8(118)	④	12(55)	④									
81	三十六哥仙 柿本人麿	4~5	揃		補1(112)	④	11(*227)	④									
82	三十六哥仙 紀貫之	4~5	揃		4(53)	④	補1(113)	④									
83	三十六哥仙 紀友則	4~5	揃		9(1)	④	補1(*258)	④									
84	三十六哥仙 三条院女藏人左近	4~5	揃		4(175)	④	13(158)	④	補1(*262)	④	補1(*263)	④					
85	三十六哥仙 藤原清正	4~5	揃		補1(41)	④	11(*206頁)	④									
86	三十六哥仙 源順	4~5	揃	雪竹	14(138)	④	補1(119)	④	補1(*261)	④							
87	三十六哥仙 源信明朝臣	4~5	揃		10(73)	④	補1(117)	④									
88	三十六哥仙 源宗于朝臣	4~5	揃		14(139)	④	補1(116)	④									
89	三番叟	4~5			13(41)	—	補1(*298)	③	12(154)	④							
90	猫を抱く美人と鼠を持つ若衆	4~5		雪松	14(50)	—	補1(*290)	—									
91	臥龍梅	4~5		源・雪松	補1(58)	③	13(*12)	③	補1(288)	③							
92	宇津保物語	4~5			10(155)	③	補1(*313)	—									
93	梅見美人	4~5			4(58)	③	補1(*286)	—									
94	大黒天の胴上げ	4~5		鶴・雪笹	9(52)	③	補1(133)	③	13(*18)	③	補1(*300)	③					
95	女三の宮と猫	4~5			4(*38)	③	補1(*308)	③	補1(*309)	③							
96	子供獅子	4~5			補1(64)	③	13(*33)	③	補1(*297)	③							
97	桜下の駕籠	4~5		雪笹	4(190)	③	補1(*277)	③									
98	破魔弓	4~5			7(25)	③	補1(*296)	③									
99	病鶏	4~5		雪松	9(51)	③	補1(*291)	③									
100	布袋の行水	4~5			13(*34)	③	補1(*302)	③									
101	松本屋店先	4~5			9(17)	③	補1(123)	③									
102	柿もぎ	4~5		市松	4(63)	③	補1(*287)	③									
103	双六遊び	4~5		市松	補1(5)	③	補1(*271)	③									
104	百人一首 柿本人麿	4~5			13(48)	③	11(*228)	③									
105	百人一首 小式部内侍	4~5			補1(120)	④	9(*14)	④	補1(*265)	④							
106	秘文	4~5			9(87)	④	補1(*267)	④	補1(*268)	④							
107	雨中の菖蒲摘み	4~5			10(192)	④	補1(*285)	④									

No.	題 目	制作年	種別	模様	巻数(図版番号)・落款										図		
108	縁先美人	4~5			12(157)	④	補1(122)	④									
109	男客から文を隠す美人	4~5		市松	補1(54)	④	補1(*282)	④									
110	蟹のいたずら	4~5		鶴	12(118)	④	補1(*279)	④									
111	蚊帳を出る女	4~5			15(95)	④	補1(*275)	④									
112	観音堂	4~5			補1(48)	④	13(*15)	④									
113	子供の相撲	4~5			補1(295)	④	13(*8)	④									
114	琴を弾く娘	4~5			15(98)	④	補1(56)	④									
115	清水小町	4~5			補1(65)	④	補1(*307)	④									
116	宝船の七福神と富士山	4~5			補2(422)	④	補2(*550)	④									
117	茶挽白	4~5		雪笹	14(137)	④	補1(57)	④									
118	堤上の煙管火もらい	4~5			補1(53)	④	7(*214)	④									
119	闘鶏	4~5			4(198)	④	補1(*292)	④									
120	布袋の道行	4~5		市松	13(43)	④	補1(135)	④									
121	つれづれ草を読む美人	4~5			4(188)	④	補1(*284)	④									
122	宮詣で	4~5		市松	補1(63)	④	13(*11)	④									
123	雪で犬を作る二人の禿	4~5			補1(*273)	④	補1(*274)	④									
124	塀のそばで傘を持つ若衆	4~5			補1(128)	④	4(*39)	④									
125	風流江戸八景 上野の晩鐘	5	揃		7(152)	③	補1(139)	③									
126	風流江戸八景 角田川落雁	5	揃	雪松	7(23)	④	補1(*315)	④									
127	風流五色墨 宗瑞	5頃	揃	雪柳	補1(142)	③	13(*24)	③									
128	風流五色墨 素丸	5頃	揃	市松	13(15)	④	補1(144)	④	補1(*319)	④							
129	風流五色墨 咫尺	5頃	揃	雪輪	8(148)	④	補1(143)	④									17
130	風流五色墨 長水	5頃	揃	布目	10(71)	④	補1(141)	④									
131	見立業平東下り	5~6	見	市松	補2(350)	③	11(*206頁)	③	補2(*490)	③	補2(*491)	③	補2(*492)	③			5
132	見立芦葉達磨	5~6	見		補2(434)	④	補2(*563)	④									
133	風流雪月花 雪	5~6	揃		補2(329)	③	補2(*471)	③	10(*9)	③							
134	風流雪月花 月	5~6	揃		補2(330)	④	4(*35)	④									
135	風流雪月花 花	5~6	揃		7(151)	④	補2(381)	④									
136	風流うたひ八景 絃上の夜雨	5~6	揃		4(181)	③	補2(*469)	③									
137	風流諷八景 松風の秋月	5~6	揃	市松	9(49)	③	補2(*470)	③									
138	風流四季歌仙 弥生	6頃	揃		4(51)	④	補2(*468)	④									
139	風流四季歌仙 卯月	5~6	揃		4(52)	③	補2(*463)	③	補2(*464)	③	補2(*465)	③					
140	風流四季歌仙 五月雨	5~6	揃		8(117)	③	補2(*466)	③									
141	風流四季歌仙 立秋	5~6	揃	雪竹	12(121)	③	11(*226)	③									
142	風流四季歌仙 神楽月	5~6	揃		補2(375)	③	補2(*467)	③									
143	風流四季歌仙 十二月	6頃	揃		補2(328)	④	13(*23)	④									
144	かいでや店先	5~6			補2(342)	③	13(*16)	③									
145	格子越しに話す二人の女	5~6			補2(427)	③	補2(*551)	③									
146	尺八を吹く若衆	5~6		雪笹	補2(430)	③	補2(*557)	③	補2(*558)	③	補2(*559)	④					
147	三味線の音締めをする女	5~6			補2(*570)	③	補2(*571)	③									
148	三味線をひく男女	5~6			9(16)	③	補2(*487)	③									
149	松千歳の契り	5~6		源	補2(349)	③	補2(*489)	③									
150	松の影	5~6		鶴・雪柳	4(50)	③	補2(*483)	③	補2(484)	③							
151	雪の門	5~6			補2(346)	③	10(*10)	③									
152	綿摘み	5~6			8(149)	④	補2(333)	④	補2(*476)	④							
153	秋の風	5~6			9(2)	④	補2(486)	④									
154	女仕丁	5~6			9(121)	④	補2(386)	④									
155	笠森お仙と若侍	5~6			11(86)	④	補2(*481)	④									
156	後朝の別れ	5~6			8(18)	④	補2(*477)	④									
157	猫と鼠	5~6			補2(345)	④	13(*20)	—									
158	ほととぎすを見る鍵屋お仙	5~6			補2(*560)	④	補2(*561)	④									
159	初午	5~6			補2(344)	④	13(*19)	④									
160	髪結い(子供の髪を結う母親)	5~6			補2(385)	③	13(*9)	③									
161	花づくし 花王	6頃	揃		14(52)	④	補2(390)	④	7(215)	④							
162	花づくし 水仙花	6頃	揃		補2(352)	④	13(*25)	④									

No.	題 目	制作年	種別	模様	巻数(図版番号)・落款								図		
163	花づくし 萩	6頃	揃		4(174)	④	補2(*503)	④							
164	花づくし 闇夜梅	6頃	揃		補2(322)	④	12(*15)	④							
165	当世七福神 恵美寿	6頃	揃		4(*49)	③	補2(*501)	③							
166	当世七福神 大黒天	6頃	揃		4(*48)	④	補2(*500)	④							
167	当世七福神 布袋	6頃	揃		4(*45)	③	補2(*502)	③							
168	お仙の猫じゃらし	6頃			補2(359)	④	13(*29)	④							
169	京都祇園二軒茶屋出見世	6頃			13(155)	③	補2(*478)	③							
170	朝妻船	6~7			12(60)	④	補2(363)	④							
171	うきふし	6~7			補2(358)	③	補2(*517)	④	補2(*518)	④					
172	禿の肩を抱く遊女	6~7			11(21)	④	補2(355)	④							
173	かぎやお仙	6~7			10(193)	④	補2(361)	④							
174	寄菊 為敦	6~7			13(47)	③	補2(323)	③							
175	浮世美人寄花 南の方 藤	6~7			13(153)	③	補2(*523)	③	補2(*524)	③					
176	浮世美人寄花 娘風 萩	7			補2(*525)	③	補2(*526)	③							22
177	浮世美人寄花 路考娘	7			10(72)	④	補2(*527)	④							
178	石橋	7頃			4(205)	④	補2(405)	④	補2(*528)	④					
179	伊達虚無僧姿の男女	7			補2(406)	③	補2(*529)	③							
180	いせ屋の涼台	不明		鶴	9(123)	③	4(*41)	③							
181	合せ鏡	不明			7(*216)	④	11(*225)	④							
182	更衣二美人	不明			13(122)	④	9(*15)	④							
183	炬燵の文読み男女	不明		雪輪	10(74)	④	13(*7)	④							

制作年：浮世絵の制作年を表わし、すべて明和2(1765)~7(1770)年間作のため、表では「和暦年」の数字のみを明記した。

種別：絵巻は「巻」、見立絵は「見」、揃物は「揃」で表記した。

模様：鶴の丸模様は「鶴」、「源氏香」は「源」、雪持ち柳は「雪柳」、雪持ち笹は「雪笹」、雪持ち笹と竹の組合せは「雪竹」、雪持ち松は「雪松」と省略し、雪輪模様は「雪輪」、市松模様は「市松」、布目模様は「布目」で表記した。

巻数：浮世絵の所蔵先は次の通りである。

補1・2：ボストン美術館、4：シカゴ美術館、7：メトロポリタン美術館・ニューヨーク公立図書館、8：フォッグ美術館・ネルソン美術館他、

9：ミネアポリス美術館・ポーランド美術館他、10：ホノルル美術館他、11：大英美術館他、12：ギメ東洋美術館・パリ国立図書館他、

13：ベルギー王立美術歴史博物館・アムステルダム国立美術館他、14：ベルリン東洋美術館・リートベルク美術館他、15：東京国立博物館

図版番号：*マークは単色写真を示す。

落款：名前：工案者名、細工者：彫工、①：画工(鈴木春信画)・彫工・摺工、②：画工・彫工、③：鈴木春信画、④：春信画、一：無款

図：拙稿の図版番号を示す。



図2 絵暦「矢場の女たち」



図3 絵暦「小町娘の憩い」(左:初摺、右:後摺)



図4 「見立夕顔」(左:初摺、中央:第2版、右:第3版)



図5 「見立業平東下り」(左:初摺、右:第5版・きもの絵版画)



図6 「坐鋪八景」台子の夜雨



図7 「五常」礼（婚礼・色直し）（左：初摺、右：第2版）



図8 「五常」義



図9 「夜の梅」



図10 「伊勢物語 高安通い」（左：初摺、右：後摺）



図11 「遊女と禿と小犬」



図12 「瀬川菊之丞」



図13 「布に乗って空を飛ぶ女」



図14 「臥龍梅」



図15 「見立高砂」



図16 「風流四季歌仙」 図17 「風流五色墨」 尺尺 図18 「風流五色墨」 蓮之 図19 「遊女と禿と小犬」

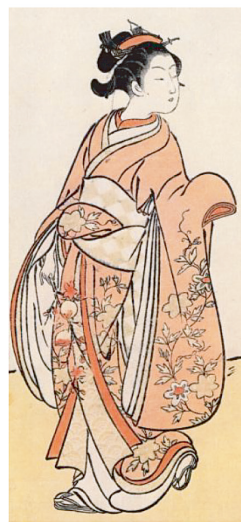
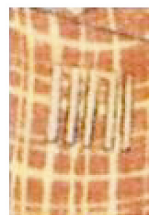


図20 「見立夕顔」 源氏香：「夕顔」 図21 「桃の枝を折取る男女」 図22 「浮世美人寄花 娘風 萩」

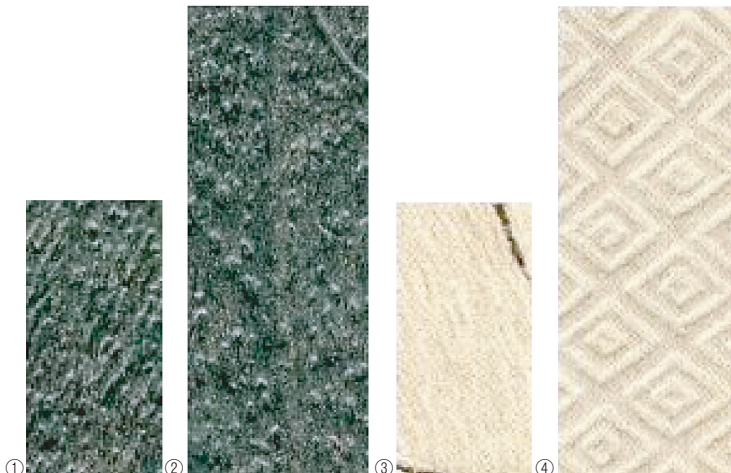


図23 「雪中相合傘」の男女 空摺の布目①男性の頭巾②男性の羽織・小袖③女性の頭巾④女性の小袖